注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

トリニティセブンと幽波紋使い

【作者名】

無邪気な邪気

【あらすじ】

スタンド能力者がアラタ君とトリニティセブン達に混ざって楽しく過ごす（予定）お話。

初投稿で実力も知識もそれほどない（実力は皆無）ですが、温かい目で見て下さい。

感想やアドバイス等頂けたら幸いです。

設定

本名

・西城　ユズル

この名前は一応、ユズルを漢字にするとジョジョになります。本編で言うと本名バレるので言いませんが。スタンドチート主人公の小説を書こうと思ったときに考えた人物。もともとは、ハイスクールＤ×Ｄというライトノベルの二次小説を書こうとしたときに使う予定の主人公でした。原作に追いついたら番外編として書いてみてもいいかもしれません。（そんな先の事より今の事をちゃんと考えろという話ですが。）

性格

・基本的に敬語を使わず、束縛されることを拒み、社会性がないです。恋には疎く、経験した事がありません。

この性格もハイスクールＤ×Ｄで使う予定だったモノ。

身長、体重

・身長は１５２㎝です。体重は４５㎏。小柄というより子供です。顔は童顔。ショタっ子ですね。

承太郎系より身軽な方が好きなので、こうなりました。完全に私の好みです。ショタコンではないです。ちなみに魔人探偵脳噛ネウロという漫画の怪盗Ｘｉというキャラがモデルです。

服装

・学園でも基本パーカーです。束縛されるのが嫌いな性格なので、制服なんて着ません。リリスに毎回注意されますが、無視しています。無地のパジャマみたいなズボンをはいています。

パーカーもただ単に私の好みです。ゆったりしたのが好きなので。

能力

・スタンドを全て使えるというよくあるもの。レクイエムやラブトレイン、メイドインヘブン等、発現に条件があるものや、エコーズのように進化するものは条件を満たすか進化するかしないと発現できません。スタンドを同時に二体発現はできません。

ジョジョ好きで小説を書きたいと思う人はスタンドチートを考えますよね？　勝手な思い込みですが。

他人からの評価

・アラタが来るまであまり学園に姿を表さなかったので、一般生徒とは面識はありません。トリニティセブンとは元から全員と会っています。特にレヴィ、ミラ、アキオとは元々仲が良く、少なからずの好意を抱かれています。多分。まぁ、なるようになるでしょう（適当）。

趣味

・読書。図書館の本を全て読んでいます。

特技

・速読。瞬間記憶術（スタンド能力のＴｈｅＢｏｏｋの力でもあるが）。回転の能力も習得中だが、波紋は使用できない。

ユズルはモノ覚えはいいほうです。ちなみに回転の能力はまだ黄金回転できません。従って、タスクＡｃｔ１以上はできません。

苦手なモノ

・睡魔に弱いです。食欲にも弱いです。おそらく性欲には強いんでしょうね。

この睡魔と食欲に弱いというのは私自身の性格です。お布団系男子とは私の事ですッ！ビシィ

持ち物

・拳銃

・四次元ポケット的な道具（名前はまだ無い）

ピストルズ使っているのですから拳銃は必要不可欠ですよね。銃刀法違反なんて…というか魔導士の世界に人間社会の法なんて通用しないですよ。

四次元ポケット的な道具はまだ名前を出していません。べ、別に考えてない訳では…（▽；）

ルームメイト

・アラタ

トリニティセブンの寮の仕組みがよく分からないですが、アラタの部屋にベッドが二つあったので、ルームメイトの関係にしました。

自己紹介と裸の付き合い

…あれ？　この匂いは。
本に囲まれた世界の中で、面白いものを嗅ぎとった。
「久しぶりに、出てみようかな。」
背伸びをして、立ち上がる。椅子に掛けていたパーカーを羽織って、数ヵ月ぶりに部屋から出る。
魔王、か。まだ候補だろうな。この因子、不安定だし。
さーて。楽しくなれば良いけど。

「号外でーす！　魔王レベルの転校生がやってくるらしいですよー！」
学校では、金髪美少女がなにやら配っていた。マスコミは情報収集が早いね。
「それ、一つ貰ってくよ。」
金髪美少女とすれ違いざま、配っていたものを一枚掴み取る。
「はーい！　…え⁉」
ふーん、この号外を見るに、整った顔立ちをしてるね。んで、まぁ。男ってのは珍しいし。
「あなた、その姿は…！」
金髪美少女が俺に気付き、振り返って俺の方を向く。あーあ。彼女と俺の間に人がいる事、分かってないね。このままじゃ…
「わぷッ！」
変な声を上げて人とぶつかる金髪美少女。んー。面白そうじゃん？　なかなかじゃん。魔王クン。
「それは凄そうな奴だな…」
この号外はもういらないや。号外の写真に出てる男が目の前にいるし。

いつも通り授業をサボって、本でも読もうかと思ったんだけど

なぁ。せっかく出てきたんだし探索でも行こうかな。散歩も時には大切だよね。よし、校内を歩こう。のんびりと。

少し他生徒の声が聞こえてきた。授業終わったのかな。
「すげぇ…忍者だ。」
「凄いでしょう？」
三人の人影が見える。ちょっと混ざってみようかな。
「忍者やってる風間レヴィっスよ。」
「ちゃお。能力者のユズルです。」
自己紹介にちゃっかり混ざってみた。
「ちょっ…ユズルさん…気配消して近づくの止めて欲しいっス。」
「んー。アンタなら気付くでしょ？　別に良いじゃん。」
「あなたがステルスかけすぎなんっスよ。」
えぇ？　んなもん調節出来ないよ。この方が楽だし。
「おーい。親しげな二人の関係を教えてはくれまいか。」
えーと…転入生の…アラタか。アラタが取り残されたような顔をしている。アラタの事忘れてた。
「別に？　友人だけど。俺もトリニティセブンに興味もあるしね。」
「間違っては無いっスけど…もう少し言い方あるんじゃないっスかね…」
何かぶつぶつ言ってる。レヴィらしくないなぁ。
「そんな関係ではなさそうだが、まぁ分かった。とりあえず、ニンジャはトリニティセブンの一人なのか？　あとアンタ…ユズルだっけ。アンタもトリニティセブン？」
そんな関係だと言うとるに。
「自分はそうっスよ。暗殺からえろい忍法までなんだってこなすっスよ？」
今のところ見たことないけどね。
「えろいのもか！」
「コラーッ！」
リリス大変だね。お勤めごくろーさん。

「あ。俺はトリニティセブンじゃないよ。魔道士にもなってないし、魔道書すら持ってないから。アラタより下だね。」
　魔道書探すのめんどいじゃん。どこにあんの？地面とか掘ったら出てくんの？
「魔道士じゃないってだけで、戦闘能力的には自分と同じくらいに強いっスけどね。」
「マジでか！」
「嘘だよ。うそうそ。レヴィに勝てる訳ないじゃん。信じるなよ？」
「ユズルは本気ださないじゃないっスか。本気出せば強いっスよ。」
「結局分かんないのか…」
　ま、そういうこったねぇ。
「というか貴方はまず、授業に出席して下さい！いつも居ないのは問題があります！」
　リリスに怒られちゃった。どーでも良いけど。
「んー…　勉強はちゃんとしてるし。あとは魔道書があれば魔道士になれるよ。だから、別に良いじゃん。俺、束縛嫌いなんだよ。」
「はぁ…　とりあえず、魔道書を得るためにも、授業は出席して下さい！」
「はーい。」
　嘘をつくのは簡単な事なんだね。
「んで、トリニティセブンはリリスと、レヴィの他はどんな奴なんだ？」
　アラタが聞いてくる。そうだなぁ。
「窓の外。ミラとアキオだね。二人もトリニティセブンだよ。おーい。」
　呼びかけるが、窓があるため声が届かない。むぅ。この窓どうやって開けるの？
「へぇ。あの二人か。って何やってんの？」
　アラタが話しかけてくるが、無視。全身の力を抜いて。意識を集中させる。
「おっ。ユズルの能力が出るっスよ。注目っス。」

三人の視線を浴びる中で、発動する。
「クレイジー・ダイヤモンドッ！」
瞬間、見えない右手が、窓を破壊した。やったぜ。
「おーい。ミラー。アキオねーちゃん。やほー」
外の二人に呼びかける。
「なっ…何をしているのですか、あなたは！」
「ようちっこいの！　その窓、直しとけよ！」
「うーん。行ってらーい。頑張ってねー。」
手を振って見送る。何かミラの顔赤い気がしたけど、大丈夫かな？
「今の二人は？」
アラタが不思議な顔をして問う。さっき言ったじゃん。あぁ、能力を知りたいのかな。
「金髪の方が、純粋に能力だけならリリス先生以上の山奈ミラさんっス。ちなみに、ユズルを見るたびに顔が赤くなるっス。」
「ほほう。どんな関係なのか気になるな。」
…？　顔が赤くなるのって俺のせいなの？
「俺は友人だと思ってるけど…俺のせいで赤くなるのか。…アレルギー的な？　嫌われてんのかな。」
うーん。よく分かんねぇ。誰か助けてよ～う。
「こんな人っスから。多分気付いてないっスよ。」
「ミラも大変だな。」
「勉強では理解力が高い方なのですが…」
「「はぁ…」」
三人ともため息がハモるの止めてくれないかな。俺だけ状況が分かってないし。
「で、背の高い方は？」
「純粋に攻撃力だけなら他の追随を許さない不動アキオさんっス。強いっスよ～？」
「ふーん。あと、ねーちゃんって呼ばれてたけど、何で？」
あー。そう言ったね。特に深い理由はないけど。
「何か…雰囲気がそんな感じだからさ。面倒見もいいしね。」

「そうか…　にしても、女が多いんだな。」
「さっぱり言うと、女の方が精神的に魔道と相性が良いんスよ。」
「感情的な方が良いってことだよ。学園長もそうだったでしょ？」
「欲望に忠実ってことか？」
　核心を突いてるな。さすが魔王候補。
「そ、そういうのは節度を持ってですねっ…」
　真っ赤なリリス。教師は大変ですね。
「ほら、真っ赤でしょ？　そそられたりしませんか？」
「かなり。」
　少なくともアラタのテーマは色欲ではないね。
「アラターッ！」
　バチコーン。
　なにで殴ったらこんな音するの？
「いっつ…機嫌悪いよな。」
「んー。楽しそうだけどね。」
「確かに、リリス先生にしては珍しいっスけど。ユズルも珍しいっスね。こんなに長く喋るなんて。しかも外の世界で。」
「そりゃあ…魔王候補のお出ましだからね。自分の部屋を離れてでも、見てみたいもんでしょ？」
「…ま、出てきてくれて嬉しいっスけど。」
「これからは、ちゃんと寮で過ごすよ。ちょっと運が良いからね。んじゃ。グッバイ。」
　二人に背を向けて、手を振る。さーて。少し寝ようかな。

　ガチャリ。
　ドアを開ける音。
「んあ…？　なんだ、アラタか。気持ち良く寝てたのに。」
「お前がルームメートか。ドアの開閉の音で起きるって…どうやって入ればいいんだよ。無理ゲーじゃねぇか。」
「レヴィならいける。」
「ニンジャと同じレベルで見んなって。ふぅ。疲れた。」

アラタも別のベッドに寝転がる。初日はそんなもんだろーね。
『なぁ。疲れたんなら風呂に行かないか？』
アラタの魔道書って喋るの？　なんて便利な時代になったのだろうか。目覚まし要らないじゃん。
「そうだな。でかい風呂があるらしいし。」
「んー…　俺も久しぶりにいくかな。」

「男風呂もでかいなー。」
『無駄に金かけてるんだろうよ。』
「学園長があんなだしね。」
皆口々に感想を述べ、服を脱ぐ。
ガララッ
風呂にはアリンが立っていた。またいるのか。別に良いけど。
「こんばんは」
「こんばんは」
「リリスに怒られても知らないよ、アリン。」
「私は別に良いわ。」
「だろうね。」
さてと、シャンプーを手に取り、頭を洗う。アラタも洗いはじめている。シャンプーって目にしみるとありえないくらい痛いよね。
「それ、ボディーソープよ？」
「マジか」
なんかアラタが間違ってる。ボディーソープをシャンプーと間違って身体洗うよりは被害少ないだろうけど。ぬるぬるするよね。あれ。
「だあぁあああ！」
「アラタうるさい。響く。」
風呂で歌うのは良いと思うけど。風呂だと響いて気持ち良いんだよね。
「お前落ち着きすぎだろ！　女だぞあいつ！」
「だってアリンいつも男風呂にいるから慣れた。」

「私も。」
「俺がおかしいのか⁉　誰かー！」
走り去っていくアラタ。風呂入れよ。とりあえず身体を流して風呂に入る。やっぱり気持ち良いね。風呂の外が騒がしいけど。
「アリンさん！　ここは男性用なんですよ！」
リリスが入ってくる。
「そのセリフそのまま返すよ。」
アンタも女でしょう。
「…キャーッ！」
ドゴォン

「自分から入ってきて銃撃とか理不尽すぎるよね。」
「それで無傷なお前はおかしい。」
「能力者を甘く見てちゃだめだよ。」
風呂で疲れるのは初めてだ…

とある深夜の我慢大会（不本意）

「…で、何でお前らが俺の部屋にいるんだ…？」
アラタが部屋に入ってきての第一声。その言葉は俺に向けてではなく…
「取材です！」
「取材っス」
「わ、私はこんな時間に女子が男子の部屋にというのが教師として許せなくてですね…」
この前、号外を配っていた金髪美少女セリナと、レヴィ、リリスが集合していた。
「別に良いじゃんか、アラタ。減るもんじゃないんだし。」
勝手に部屋に入るくらい別に。プライバシーは減るかもだけど。
「んじゃ、俺は寝るから。アラタ、あとは勝手にやっててくれよ。」
ベッドに寝転がる。ふぁぁ。眠い…
「あ、ユズルさんも取材良いですか⁉」
「え…」
もう寝る気満々なんだけど。
「別に良いじゃねーか。減るもんじゃないだろ？」
この魔王候補野郎…俺の言葉を利用するとは…
「まぁ良いけど。この姿勢のままで良い？」
睡魔で身体が動かないんだよ。
「良いですよ。では…」
「取材か。」
「んー。取材って…」
「うむ…好きな食べ物は唐揚げだな。」
あ、そういうので良いんだ。
「ユズルさんは？」
「科学的な食品でなければ大抵好きだけど。」
「サプリメントじゃなければマズくても好きって事ですね！」

それ食品かなぁ。
「まぁ。」
「ですってよ!?　リリスセンセッ！」
「私の料理はマズくないですっ！」
こんな時間なのに元気だね。
「んじゃアラタさん。忍者特製唐揚げ食べてみるっスか？」
「レヴィのつくる料理は大抵惚れ薬入ってるよ。」
惚れ薬ってどうやって入手したんだろうね。
「ユズルに惚れ薬が効かないのが悪いんスよ…」
「おおっ！　二人の関係も取材したいです！」
「友人。」
コーラを飲んだらゲップがでる並みに当たり前の事を聞くなんて。
無駄ったらありゃしない。
「速攻で終わったな。でも、惚れ薬入りはちょっと食べてみたいな。」
「ま、滅多にできない体験ができると思うよ。」
体験した俺が言うんだから間違いない。
「では、惚れ薬を飲んで野獣化したら、誰を襲いますか？」
いや俺は野獣化はしてないけど。
「うーん…そうだな…胸のデカい順だろうな。」
リリスが自分の胸を隠す。自覚はしてんだね。
「アラタ…！　本当に貴方って人は…！」
「まぁまぁ。皆悪のりしてるだけじゃねーか。それより、部屋にきたついでに魔道について教えてくれよ。」
「あ、はい。それなら…」
「リリス先生は根っからの教師ですからね…」
「勉強に持っていかれると弱いんスね。」
「意外と簡単だよね。」
『だめよ…こんなこと…私達、生徒と教師なのよ…？』
『俺、もっとリリスの事が知りたい…』
『アラタ…』
「という夜のレッスンに…」

「なりませんっ！」
　女子は想像力が高いようで。そしてリリスのツッコミはキレが良いね。いつも以上に。
「リリス先生いじりかわいいです。」
「萌えリリスっスね。」
「かわいいかわいい」
　手をパチパチと鳴らす。
「ユズル…」
「レヴィ、なんでそんなに睨むの。冗談無しに怖いんだけど。」
「…発言には気をつける事っスね。」
「二人の関係が分かった気がします。」
　何なんだ一体…
「というかリリス。この魔道書は何なんだ？」
　アラタの持っている魔道書を見る。んー。
「もうちょっと詳しく見ないとだけど、アスティルの写本じゃないっけ？　それ。」
「アスティルの写本⁉　本当ですか⁉」
「学園長もそう言ってました…」
「じゃああんま信用できないね。」
　あのスケベおじさんの言うことだし。
「でも学園長は本当は凄い方ですし…」
　ドォッ！
　おっと。なにこれ。
「うぉい暗ッ！」
「地震と停電⁉」
「重い…」
「そこは違うっスよ…」
「俺も動けないや。」
「貴方は眠いだけでしょ！」
　バレた。んー。こんな暗いと本気で寝そうだからな…
「ゴールド・エクスペリエンスッ！」

パーカーをゴールド・エクスペリエンスで蛍に変える。蛍に照らされた部屋は凄い事になっていた。まぁ…ラッキーエロスって事だ。アラタの。

「だめだな…　ドアノブすら回らない。」

傷だらけのアラタが話しかける。

「まー結界だからねぇ。『何か』をしないと出れないようになってんだね。」

『今回はそういうゲームなんだろうさ』

アスティルの写本が喋る。

「ゲーム…？　お前、脱出方法分かってるだろ。」

『まぁこんなの、調べればすぐに分かるレベルだな。』

あぁ。そうなの？　じゃあ調べてみるか。

「ハーヴェスト。行けッ！」

『んじゃ、そこのにーちゃんがアリみたいなので調べてるし、私は寝るぞ…ふぁぁ。』

「また寝んのかよ…」

んー。まぁ分かったけど…って

「おいアスティルの写本。ハーヴェストが見えてんの？」

『私はアスティルの写本だぜ？　そのくらい見えるに決まってんだろ？』

アスティルの写本凄い。欲しい。ま、異世界の知識が詰まった魔道書らしいからね。スタンド能力がある世界だって存在するか。

「じゃ、お休み。もう『鍵』は分かったし。」

『そうか。さすがだな。皆が分かったら起こしてくれ。ＺＺＺ…』

「寝つき早っ。で、ユズルさん、脱出方法は何なんですか？」

セリナに急かされる。えぇー。

「まぁ。頑張って。俺も寝るから。お休み。」

「あっ、教えて下さいよ！」

「俺が…教えちゃつまんない…だろ…」

睡魔に負け、視界がブラックアウトした。

ガンッ！
「痛ッ！」
寝ているところを木の破片を投げられて起きた。何なんだよ。
「ユズル…この状況から助けてくれ。」
アラタが話しかけてくるが、いかんせん寝起きは視界がぼやけて状況が分からない。
「どうした…？　ふぁぁ～」
あくびをして目をこする。
はっきりとした俺の目に入ってきたのは、何かを我慢して極限状態の女子三人組だった。
「…？　ごめん、目にゴミでも入ったらしい。変な光景が…」
「いやそれ現実だわ。結局脱出方法分かんなくて…　この部屋にトイレが無くてな…」
あぁ。なるほど。トイレに行きたいという訳ですね。
「…このままにしておいた方が、読者も喜ぶと思うけどね。なぁ、アスティルの写本？」
『まーな。それに、マスターの好きな展開にもなるぜ？』
「別に俺はそれで良いのだが、三人の殺気が…」
女子チームからは、確かにドス黒いオーラが出ていた。これは冗談抜きでヤバいらしい。
「んじゃ助けるとするかな。よっと。」
ベッドから降りて、背伸びをする。
『おっ　良いのか？　アリンと学園長に何か言われるぞ？』
「今助けないとこいつらに後で殺される。助けてもアリンと学園長に何か言われる。どっちが良いか、一目瞭然だろ？」
『ははっ！　板挟みな状態だな？』
「どっちに転んでもマイナスでしか無いからね。困ったもんだよ。さて…」
スタープラチナを出現させて、ベッドを殴り、破壊する。結界の『鍵』はベッドの下にあったッ！

「行ってらーい。」
スタープラチナでドアを開けて、三人に手を振る。やれやれ。
『なかなか面白かったな。ユズル？』
「疲れたけどね。まったく。セリナはまだしも、トリニティセブンの二人が尿意に負けるとはね。」
はぁ、疲れる夜だった。

魔王観察と崩壊現象（不本意）

今日も快晴でなにより。
授業も終わったし、散歩でもするかな。
「ちょっと…ユズル、助けてくれ。」
背後からアラタに声をかけられ、振り返る。
いつも通りのアラタと、完全にアラタを凝視しているアリン。何かあったの？　そして何があったの？
「んー。助けるのは無理で無駄だと思うけど。」
大体どうやって助けろと？　トリニティセブンに逆らうの怖いし。ヘブンズ・ドアーで命令する…のはちょっと嫌だな。下手すると能力が『崩壊』させられそうで。てな訳で無理。
「アリンも、俺が居ちゃ邪魔でしょ？」
「まぁ…そうね。でも、あなたも魔王因子が無いって決まった訳じゃないから。」
ん？　えーと。つまりどゆこと？
「学園長が『ユズル君は魔王因子の有無の解析ができない』って。」
魔王因子があるかどうかも分かんないって事か。
「解析すらできない…つまり、俺が故意的に解析できないようにしているって事？　何らかの方法を使って？」
「もしくは解析できないような体質か。おそらくあなたが言ったものだろうけど。」
疑われてんなぁ。やれやれ。
「まぁ、そんな体質あり得ないからね。でも、魔道士にもなってない俺が、学園長の解析を防げるかな？」
大魔公からの解析を防げる魔道なんて持ち合わせていない。
「でもあなたには、不思議な能力がある。」
「そんな都合の良い能力はなかなか無いもんでさ。魔道の解析にはめっきり弱いんだ。」
スタンド能力での闘いに、『解析』なんてなかったからね。対抗する

能力は無い。
「そう…難しいのね。」
「そういうもんだよ。証拠に、学園長が言ったかどうか分かんないけど、俺の能力は解析でどんどんバレたと思うよ。」
嫌だなぁ。スタンドってのは、能力がバレるのは弱点になるのに。
「少し聞いたわ。…１００以上の能力を持っている、と。」
おおう。まじか。そんなにあったっけ。数えてないけど。
「ま、良いや。しゃーないし。」
「話が終わったなら聞くけど、何でアリンは俺の事を見てたんだ？」
アラタが不思議そうに聞く。まずそこだよな。
「魔王候補を見ていたの。私は、魔王の伴侶になるらしいから。」
話がぶっ飛びすぎてる気がする。
「ま、学園長に聞いた方が早いんでしょ？」
「そうね。」
「正直何がなんだかさっぱりだが…」
学園長室に向かおうとするが…
「呼ばれて飛び出たーッ！」
ガシャーンパリンパリン。
窓を突き破って登場する学園長。何がしたいんだろ。
「ツッコミ役を呼んで別のところでやろう。」
「……」
「窓直しといてね。学園長。」
「え…空間の連続性とか無視して大技で飛び込んできたのに無視!?
僕の扱い酷くない!?」

～保健室～
「婚前交渉？」
「大変魅力的な提案だ。」
「何言ってるんですか!!」
「あぁ…リリス。お前がいると安心するよ…ずっと俺のそばにいてくれ。」

「早速浮気された伴侶。」
「じゃあアリン俺が貰うよ。」
「いや待て、俺は二人同時でも一向にかまわな―」
ドゴッ！
「痛い…」
「暴力反対。」
日本はそういうの厳しいんだぞー。まったく、俺とアラタの身体が奇跡的に丈夫だから良かったものの…常人ならアザができるぞ。
「で、聞くけど、何で俺らを結界で閉じ込めたの？」
「学園長に『あの二人のどちらかが君の番だよ』って言われたから。」
「アイツめ…！」
リリス顔が怖いよ。アレが漏れそうになったくらい別にいいじゃん。
「ほうほう。他には？」
「ハダカを見られたのは貴方達だけ。」
「いつもありがとうね～。」
「ごちそうさまでした。」
「おそまつさまでした。」
綺麗な身体だと思うけど。
「はぁ…　しかしこないだのアレはアリンさんだったとは…」
リリスが疲れたようにため息をはいた。
「ああ…アレか。」
「もう少しで読者の望む展開になるところだったのにな。」
「何言ってるんですか！」
残念でならないよ。
「あそこに他人が居たのは事故よ？」
「まぁ…　リリスも自分から俺らの部屋に来たんだから、自業自得でしょ。」
「そういう事だな。」
後から俺が寝ている時の事を聞いたが、一番の被害者はセリナだと思うな。

「それに、学園長が『魔王候補を極地に立たせれば崩壊現象が起きるかもしれない』って。」
「あのジジイを消そう。」
「リリス、アイツはどこだ？」
「ご心配なく。　うるさそうなので縛って焼却炉に捨てておきました。」
「「ナイス。」」
　ま、サウナ程度にはなるだろ。
「でも、なんで崩壊現象を…」
「多分、こういう事だと思う。」
　アリンが自分の左手とアラタの右手をかざす。
　またヤバい事に挑戦するなぁ。アリンは。
　アリンの左手に着けている指輪が輝く。
「〝憤怒（イーラ）〟の〝書庫（アーカイブ）〟に接続。　〝テーマ〟を実行するわ」
　その言葉がスイッチになり、アリンの身体が光に包まれる。
　光がおさまると、服装が変化し、魔道書を手にしれいるアリンの姿があった。
「憤怒のアーカイブか…　メイガスモードになるなんて、魔道士には憧れるよ。ホント。」
　カッコイイもんね。メイガスモード。
「私のテーマは崩壊《ルイーナ》。だから…ほら。」
「アラタ！」
　リリスの叫びに反応して、アラタを見る。
「…ぐッ！」
　うずくまって、震えている。やっぱりね…
「彼の魔力を抑え込んでる魔道書の制御を崩壊させたわ。」
『おいおい、ここでコイツの魔力を解放させる気かよ!?』
「…まぁ。十中八九崩壊現象が起きるね。やれやれ。」
「そう…　学園ごとね。」
　いやぁ。軽く言ってくれるね。
「ぐぁああッ！」

アラタの悲鳴と共に、物が粒子に変わっていく。
「このままだと学園はおろか、ここの地域一帯が無くなるけど。俺らも含めてね。そこらへん、理解してるよね。」
「その通り。でも、私のテーマ〝崩壊〟に最も近しい存在。」
「どんな犠牲を払ってでも、研究を優先する、魔道士としてはあってるよ。…ま、それを阻止する人達もいるんだけど。」
突然、保健室の壁にヒビが入り、破壊される。
「…おかえり。仕事中だったんじゃないの？」
「できる女は仕事が早いんだよ。な、大将？」
「なんで私に振るんですか！」
さてと。ここからは、ミラとねーちゃんに任せるとするかな。こういうのは、プロにやらせないとね。

テーマ決定と新必殺技

黒い太陽が出現し、物質が粒子となって消えていく。多分、保健室の外では物質だけじゃなく、魔力の弱い生徒すらも消滅してるんだろうな。今のところトリニティセブンや俺は大丈夫だけど。崩壊現象ってのは何が起きるかよく分かんないからねぇ。

「崩壊が…停止させられている…」

アリンの呟きに反応して、辺りを見回す。黒い粒子が空中で止まっている。…やっぱり強いなぁ。

「私の魔術で同等の崩壊の魔術をぶつけ、中和しています。」

ミラの魔術が強いのか…アラタが魔王候補としてはまだ弱いのか…

両方だろうけど、魔王候補の暴走にかなう魔力なんて普通じゃない。さすが王立図書館首席検閲官（グリモワールトップセキュリティ）ってところかな。

「私の傲慢（スペルビア）に属するテーマ正義（ユースティア）の名の下に、一切の不浄は許しません！」

おぉ～　格好イイね。拍手したらミラに睨まれた。何故だ。

「…アキオ。彼を殺してください。この男が崩壊現象の起点です。」

「あっさり言ってくれるぜ。」

アキオの右足に光る文字が現れる。んー…

「ッ！　体が動かないわ！」

「ミラの魔術の拘束を破るなんて無理だねー。…アリン、諦めた方が良いよ？」

実際、俺も動けないし。ただ…能力は使えるけどね。

「悪く思わないでくれよ…恨みはないが…

魔を打つのが私の役目なんでね！」

瞬間、保健室の壁が壊れる音と共に、アラタの魔力が消えた。

「さて、仕事は終わりました。帰りましょう、アキオ。」

「…いや、ちょっと待ってくれよ。大将。」

「何ですか？」

「ユズルが何もしないってのは、違和感があってな…あのにーちゃん、

友人だったんだろ？」
　あれ、バレたか。
「いや、ねーちゃんは鋭いね。…アラタがこの程度で死ぬような奴だったら、俺はこんなところに出てこないよ。居心地の良い俺だけの世界を抜け出してまで、アラタに会いに来たんだ。」
　ま、今回のは完全に運が良いだけだけど…運も実力のうちってね。
「…つまり生きているの？」
「そのようですね。崩壊現象が終わっていませんし。」
　ミラに再度睨まれる。またかよ。やっぱ俺嫌われてんのかなぁ。
「俺は何もしてないよ。ちょっと未来を読んで、アラタの生死を確認してただけ。俺も少し危ないし。」
　崩壊現象で保健室の床が粒子になっていく。このままどこに落ちていくのか実験してみるのも良いけど、やることもあるからね。ストレイキャットの能力を使って、空気の塊で足場を作る。ミラ達は魔術の障壁でしのいでいるようだ。崩壊現象って…気体まで粒子にならないよね。そうなると冗談抜きヤバいんだけど。足場無くなるし。
「あー。…ミラ、ちょっと聞いて欲しいんだけど。」
「…なんでしょうか。」
「アラタがもうそろ帰ってくると思うんだけど。帰ってきたアラタを攻撃しないで欲しいんだよね。多分…アイツの力で崩壊現象を止められると思うんだ。それで駄目なら、俺が止めるし。」
　魔力でちょっとアラタを抑え込めば、崩壊現象も消えるでしょ。
「…良いんじゃないか？　大将。ユズルの能力もあるし。…何よりも、ユズルから膨大な魔力が滲み出てる。ここであのにーちゃんを殺せば、ユズルが何するか分かったもんじゃないぜ。」
「…仕方ありません。」
　おやおや。なんか脅してるみたいで嫌だなぁ。とりあえず分かってくれて良かった。
　そんな事を考えていると、ミラ達の立っている床にヒビが入り、破壊される。床から出てきたのは、この崩壊現象を引き起こした張本人、アラタだった。ま、知ってたけど。

「アラタ遅いよ。…で、テーマは決まった？　さっさと崩壊現象を止めてくんないと、死ぬんだけど。」
「なんでそんな事まで分かってんだよ…　とりあえず、そこそこスタイルの良い女の子にヒントをもらったからな。おい、魔道書！」
　スタイルの良い…ユイだろーな。多分。ま、ミラも分かっているし、そろそろエピタフも解除しようかな。
『あん？　もう決まったのか？』
「あぁ。俺のテーマが気に入ったら力を貸してくれよな。」
『いいぜっ！　気に入ったらな！　さぁ言えよアラタ！』
「おう。俺のテーマは―　支配だ。」
　ガシャァンッ!!
　魔道書の鎖が解かれ、バララッとページがめくれる。
　なかなかあってんじゃん。アラタが一番やらなそうで。魔王候補が支配ってのも格好イイしねぇ。
『はーハハハ！　確かにお前の心、存在、魂の意味、それは真に支配（インベル）だマスター！　そしてそれは、傲慢（スペルビア）の書庫（アーカイブ）にある！今ここにアスティルの写本は傲慢（スペルビア）の書庫（アーカイブ）にある支配（インベル）をテーマにするマスターと契約することを誓うぜ！』
「…アラタ、パパッと終わらせてよ。俺の出番なんていらないからさ。」
「おうよッ！　傲慢（スペルビア）の書庫《アーカイブ》に接続―テーマを実行するっ！」
　ドゴォッ！と激しい音と共に砂煙が舞う。
「おぉ。さすが…　なかなかやるじゃん。」
「アラタのメイガスモード…　すごい魔力…」
　良いなぁ。欲しいなぁ！　アスティルの写本！
「ここに溢れる全魔力を支配して打ち消すぜ！　崩壊現象だかなんだか知らねーが消え失せろ！」
　瞬間。崩壊現象と共に俺とアラタとミラ以外の皆の衣服が弾け飛んだ。
「きゃぁぁぁ！」

「なんだこれ！　すっぽんぽん魔術かよ！」
「これは…」
　あーらら。らしいと言えばらしいが…
「魔術や魔力が消えるワザ…　メイガスモードの強制解除か…　やれやれ。スケベも魔術にまで及ぶと馬鹿にできないね。」
　アラタが後々秘奥義とか開発したらそりゃーヤバそうだね…
「行きますよ、アキオ。」
「お、おい待てよ！　何でお前とユズルは大丈夫なんだよ！」
「だって俺…魔道士じゃないからメイガスモードじゃないし。服を魔術で作成してる訳でもないし。」
「私は嫌な予感がしたので…彼の魔術を水晶で反射させました。…今回は退きますが、次こんな事があったら許しませんから。」
　保健室の扉がピシャリと閉じられる。アラタの魔術に気を悪くしたのかな？
　バリィッ
　あ…　ミラが反射させた魔術がアラタに帰ってくるとは…
「ま、骨くらいは拾ってやるから、安心して殺られなよ。」
　リリスにね。
「アラタァァァ！」
「ぎゃぁぁぁッ！」
　なんだかんだで平和だなぁ。やれやれ。

南国労働と血祭り

アホみたいに快晴な今日この頃。何故にこんな日に南国で働かなきゃならんのだ。まったく。
「ユズルさん！　しっかり働いてください！」
えぇ。海の家で働くのより海で遊びたいんだけど。何か先日の崩壊現象で校舎が壊れたから、かねてより計画していた修学旅行をやっちゃおうということらしい。俺らは罰として労働だとか。
「だって学園の校舎壊したのアラタじゃん。」
「俺だけじゃなくてアリンのせいでもあるんだぞ。」
「私達を止めなかったユズルも悪い。」
罪の擦り付け合いになった。なんでじゃ。
「ていうかさぁ。一般生徒はともかくトリニティセブンやアラタまで学園を離れてバカンスしてたら学園を直す人いなくない？」
「ああ、学園長が頑張って直しています。」
俺に頼めばクレイジーダイヤモンドで直してあげるのに。学園長『解析』で俺の能力知ってるだろーになぁ。
「学園長はああ見えて実は凄い人っスからね～。」
レヴィとセリナが混ざってくる。セリナ海なのにカメラ持って大丈夫なのかな。防水かかってる？
「後々敵になる系の人だよね。学園長。」
学園長…まさか貴方が！　みたいな。リリスとかが言いそう。
「とにかく！　今後校舎を壊すような実験は一切禁止ですからね！」
「だからアラタの暴走が…」
「いやいやアリンの崩壊が…」
「でもユズルが止めないのが…」
デジャヴ。ちくしょう。
「ま、その気になればユズルは崩壊現象なんて一瞬で終わらせられるっスよね？」
「…冗談やめてよね。レヴィ。」

「冗談抜きっス。他の皆は知らないでしょうけど、ミラさん達に聞けば分かるっスよ。」
「そんな訳ないじゃん。冗談が続くと、俺も怒っちゃうよ…？」
　嘘を振り撒かれちゃ困るしなぁ。ちょちょっと遊んでみよう。
「おっ？　魔力を出した…本気っスか？」
　左腕を突き出して、指を鳴らす。
　ビリィ…
「アラタの変態魔術、パクってみたけど…どうかな？　ま、嘘をつく女の子には効果てきめんかな。ね、アラタ？」
「裸マフラーとは…ごちそうさまです！」
　あれ。なんでマフラーだけ残るんだろう。なんか良い感じに隠れてるから良いけど。
「くっ…　ユズルだから油断してたっス…」
「ユズルさんもスケベなんですね～」
「いや別に裸はどうでもいいんだけど…隙を突いて相手の最も嫌な事をする、それが仕返しってモンでしょ？」
「ユズルったらサディストなのね…」
『マスターの新必殺技をパクるなんて…普通じゃないぜ？　ユズルは魔道士にもなってないし…支配がテーマのマスターだからできる魔術なのにな。』
「んー。魔力を打ち消すというよりは衣服切断みたいな感じだからなぁ。俺のは。だいたい魔力じゃなくて能力を使っただけだ。結局は魔術使ってないんだよ。」
　だからマフラーを斬れないのが不思議なんだけど…
『ははははッ！　指を鳴らして発動させたように見せたのも、魔術っぽく騙すためか！　まんまとこの私を騙すなんてな！　やっぱり面白いぜお前！』
　そりゃどーも。でもそろそろヤバそうなんでね。
「ユズルさんッ！　公衆の場で女の子を…ぬ、脱がすというのはですね！」
「魔術での衣服の制作完了っス。覚悟するっスよ～？」

おおっと。逃げなきゃ。海まで行けば勝ちだぜ。ゲブ神を使えるし。

と、背後からのクナイが頬を掠めた。

「危ないなぁ。リリスも完全に銃撃する気だし。『愚者（ザ・フール）』！」

砂浜の砂を利用して、愚者（ザ・フール）で壁を作った。これでなんとか…

ビュンッ！

砂の壁を貫通してくる銃撃。マジかよ。愚者（ザ・フール）を解除する。

「ピストルズ！　あれ跳ね返してよ！」

「「「「「えぇ～」」」」」

「…後で好きなモン食べさせてあげるから。」

「「「「「ヨッシャ！」」」」」

めんどくさい奴等だけど…仕事は良いからなぁ。

「隙有りっス！」

「いつの間にって感じだなぁ。さすがレヴィ。」

クナイが上空から降り注いでくる。怖すぎ。なんで空飛んでんだよ。

スタンドは今使ってるし、ピストルズ消したら弾丸が飛んでくるだろ？　んー。

「あれ、これ…　ヤバくない？」

…流血。

「ッつ～　クナイ投げすぎ…」

夜。旅館にて。

「数百のクナイで死なない方がおかしいっス。」

「ミラとアキオねーちゃんに救護されなければ死んでたけどね。」

レヴィもリリスも俺を倒して帰りやがったし。ミラとアキオの優しさを見習えよ。

「はぁ…　どうせまた本気出してないんでしょう。次自分と闘うときは本気出さないとマジで死ぬっスよ。」

「りょーかい。皆にバレたら使うよ。本気ってやつをね。」

「おやおや、ユズルさんは凄い力を隠してるんですねっ？」

「そりゃもう凄いっスよ～。恐らく、トリニティセブン全員と闘って勝てるくらいっス。」
「ないない。さすがに無理。」
ユイとかどうやって勝てと？　無理ゲーにもほどがあるよ。
「いけません…！　絶対に駄目です…！」
「そこをなんとか！　今回だけだって！」
ん？　んー。リリスの部屋。アラタの声も聞こえる。
「だめったらだめなんです…　ちゃんと段階を踏んで…」
「お願いだ！　いいだろ？　上手くやるから！」
これは…
「えろえろっスね。」
「えぇええ!?」
「まぁそのうち■自♡▽主▲●規◆◎制な事をするんじゃない？」
ガラッ
リリスの部屋の扉が開く。おおう。
「ユズル…　昼間の事と合わせてキチンと罰をしなければいけませんね。」
ジャキンッ！
本日二回目の流血。
↓リリスの銃弾による傷と昼間の傷口が開いた事が原因。

新能力と風呂場騒ぎ

「やれやれ…」
　血を拭きながら、壁に寄りかかる。リリスの銃弾で流血した。もう意識飛びそうなんだけど。
「今後は発言を慎んでください！」
「了解了解。もう瀕死だから。これ以上は真面目にヤバいんだって。」
「けっこう大丈夫そうですけどね。」
「マジかよ…　ここまでくるとユズルってどうやれば死ぬのか分かんないぞ。」
「一回殺してみるっスか？」
「やめい。」
　もうそろ出血多量で死ぬから。今気力で生きてるようなモンだから。
「それで、結局何の話だったんですか？」
　セリナが話題を変えてくれた。いい人だ。このままだとレヴィに殺されるところだったし。まったく、見習ってほしいね。
「あぁ。ほら、俺もこの前魔術っぽいのを使えるようになっただろ？」
「すっぽんぽん魔術ですね。」
「そう。って事は、ようやく俺は魔道士な訳よ。これで聖を取り戻せるってな。」
　聖…？　知ってるような知らないような…
「そういえば、アラタさんが魔道士になりたい理由って何も知りませんね。」
「そうだっけ？　せっかくだし旅館を散策しながら話すとするか。」
「全世界の女魔道士を脱がすのが目的で魔道士になったんじゃないの？」
「間違ってなさそうっスね。」
「またそういう事を…」
　リリスにマークされた今日この頃。

「なるほどね。」
「意外とシリアスな理由があったんスね～」
「えぇ。アラタは崩壊現象の際に消えてしまった聖さんを取り戻すために魔道士になったんですよ。」
　んー。　春日　聖、か。ま、アラタにしてみれば真面目な理由で驚いたけど…
「魔道士になればなんとかなると思った訳よ。」
「主人公みたいですね！」
「それで魔道士になって調子にのったところをリリス先生に怒られたのね。」
「当たり前です！　そんな大雑把では…」
「大体、崩壊現象自体よく分かってないからね」
　普通なら崩壊現象から調べて、それから聖を救うんだろうけど…
「ん…やっぱり駄目か…」
「学園長はトリニティセブンに会えば、とか言ってましたけど…」
「そういやそんな事を言ってたな…　手込めにしろとか。」
　さすが学園長。まごう事なき変態だね。
「まぁ…　ユイとリーゼは置いといて、会えるトリニティセブンに会ってみれば？」
「そうだな…　ユイとリーゼって誰だ？」
「ユイは夢の世界でしか会えないっスよ～」
「アラタはユイと会ってるだろうけど…　リーゼはアラタが転校する前にどっか行っちゃったんだよ。」
　無責任な。王立図書館次席検閲官の立場を持ってたのに。俺だって、リーゼに聞きたい事あったしさぁ。
「会えないって事か…」
「まぁね。だから、会える皆と色々やれば、聖を救う近道程度にはなるんじゃない？」
「よし…　んじゃ、ここはやっぱり風呂だろ！」
　アラタがバッ！と指を指す先には、『混浴』と書かれたのれんがあっ

た。

「いやいや…　お前ら何も分かってねーよ！　読者のために一肌脱ぐってモンだろ！　なぁユズル！」

「うん…まぁ。とりあえず俺の傷口開きそうなんだけど。こういう時って風呂入って良いの？」

「知らん！」

うわぁ。自分から話しかけたくせに。アラタはリリス達が裸ではなく水着の事に脱力していた。変態魔術でどうにでもできるだろうになぁ。

「貴方は本当に不浄な男ですね。」

「スケベなのは事実だからな。」

ん。ミラとねーちゃんいたんだ。水着だけど。

「行きますよ、アキオ。こんな男とお風呂なんてたまったもんじゃありません。」

「とか言ってるけど、ユズルに見られるのが恥ずかしいだけだろ、大将？」

何が？　俺そんな変態じゃないんだけど。さすがに友人をそんな目で見ないって。

「なっ…そんな事ではなくですね…」

「ま、私は出ないぜ？　ユズルと風呂なんてひさびさだからな」

ねーちゃんが隣に座り込む。確かに久しぶりだなぁ。

「う…うぅ…」

顔を赤くしながらミラも隣にちょこんと座る。

「ひさびさって…何してたんですか!?」

セリナがメモ帳片手に目を輝かせる。どこからメモ帳出したの？濡れないの？

「んー…？　何ってなぁ。」

「ちょっと言わないでおくよ。ただ…懐かしいってだけさ。な？」

ねーちゃんが頭を撫でる。

「懐かしい…か。　確かにね。ミラも。昔は世話になったし。」

「…そうですね。昔は。ですが、貴方は強くなりましたから。」
「うん。次は俺が守る番だからね。」
「…ありがとうございます」
　あれ。また顔が赤くなった。何故。
「ハイはーい。イチャイチャを見せつけるのを止めてくださーい。」
「アラタさんの目的のために風呂に入ったんスからね。」
「話を戻すわ。」
「そうですね…」
「のぼせそうだからな。」
　ヤバくね？　それ。
「ちなみにさぁ。アラタの変態魔術を使いこなせば強いんじゃない？」
「…あぁ、狙って相手の魔術を消したりとかですね？」
「そうそう。銃で変態魔術を発射するとかね。」
「今のままじゃ味方の魔術も消しちまうからな。にーちゃんのすっぽんぽん魔術は。」
　できれば最強の魔力消去（アンチマジック）だしねぇ。
「んじゃ、リリス、あの銃くれよ。」
「駄目ですっ！　あの銃は私の魔術で物質化してますから、他人は使用できないんです。」
　へぇ。そうなんだ。でも、出来ない事はないよな？
「リリスの魔術をパクれば良いじゃん。アスティルの写本なら出来るだろ？　錬金術（アウターアルケミック）。授業でいろいろ教えられてるし。」
『ん…？　錬金術か？　…あぁ。いけるぜ。やってみっか。　プロセス1…クリア。プロセス2…クリア。プロセス3…クリア。』
　魔導書が光に包まれ、銃に変化する。おぉ～。
「他人の魔術をパクれるってのは…ズルいんじゃないか？」
　ねーちゃんが渋い顔をして話す。ほぼ反則みたいなモンだしね。
「ちょっと待って下さい。ならばあの不浄な男は…」
「「「「全ての魔術を使えるかもしれないって事ですか!?」」」」
　ま、だろうけどね…　なかなかチート能力なことだね。

「これは…　ユズルと並ぶぜ？　あのにーちゃん。」
「不愉快ですが…そうですね。」
「ま…　俺ももうすぐ完全に使いこなせるからね。俺も頑張っちゃうよ～」
これから楽しくなりそうだと思う。まるで物語の本編みたいだ。

睡眠授業と巨大迷宮

「ふぁぁ…　眠い…」
　あくびをしながら、教室に向かう。
「ユズルさん！　これから授業なのですから、気を引き締めて下さい！」
「そうなんだけどね…　何か身体の調子がおかしいんだよなぁ。」
　グッと背伸びをして、教室の扉を開く。すると、教室にいる生徒が全て寝ていた。アラタ以外は。
「お、来たか。これって何なんだ？」
「睡魔を軽く見た人類の末路。」
「マジか!?」
「そんな訳ないでしょう！　これは…」

「崩壊現象…？」
　俺とアラタとトリニティセブンが学園長室に集合していた。どうやらこれは崩壊現象らしい。何も崩壊してないけど…？
「つまり、魔力の強い君達以外が寝てしまった。そういう事だね。」
　なるほど。俺が眠いのはそのせいか。どうせユイの魔術だろうとは思ってたけど。
「という訳で、だ。　早速眠っているカワイイ生徒達にイタズラしよう！」
「ついに俺の本気を出すときが来たようだ。」「Ｔｗｉｔｔｅｒに『集団ボイコットなう』って写真を載せよっと。」
　バチコォンッ！
　リリスに瞬間的に殴られた。なんかツッコミの制度上がってない？
「何も殴らなくても良いと思うんだ。」
「癖になったらどうする。」
「傷が塞がったばかりなのに。『暴力教師リリス』ってツイートする

ぞ。」
「ふざけないでください！」
　ふざけてないつもりなんだけどなぁ。
「はぁ…　行きますよ、アキオ。これ以上は時間の無駄です。」
「よしっ！　ユズル、来るか？」
「そうだね。最近は休んでたから、俺もついていくよ。」
　傷も直ったし、ちょっとは強くなったしね。
「お、？　ユズルはそっちに行っちゃうのか？」
「まーね。学園長は皆で協力…とか考えてただろうけど。崩壊現象を止めるだけだから、俺らだけで大丈夫だと思う。」
「つまり足手まといです。では。」
　うわぉ。すごいストレート。俺がやんわり言ってあげたのに。
「グッバイ～」
　学園長室を出て、扉を閉める。
「ふぅ。んじゃー頑張るか。」
　首を鳴らして、気持ちを入れ替える。
「お…いつになくやる気じゃないか。」
「別に…ユイの魔術のせいで眠いし、さっさと終わらせて風呂にでも入ろ。」
「ユズルと混浴するか、大将？　水着じゃないぞ～？」
「なっ…　と、とにかく！　ユイさんの魔力は枢機クラス、油断しないでください。」
「うん。了解～」
「分かってるって。行くぞ～」
　ねーちゃんが書庫に接続し、床を破壊した。

　～学園長室～
「ユズルも行っちまったし、どうすんだ？」
　アラタは、閉じられた扉を見て問う。
「私達もユイのところへ行くのよ。」
「おそらくミラさん達はユイさんを殺すっスからね。」

「マジかよ！　ってか…なんでユズルはアイツについていったんだ？
仲は良さそうだったが…」
「その事なんだが…　彼は重要な立場だからね。」
学園長がいつものおちゃらけた雰囲気を変える。
「王立図書館検閲官次席…　本当はトリニティセブンの中から選ばれるものだけど、首席と参席の彼女達から推薦されちゃあね。」
やれやれといった様子で椅子に寄りかかる。
「そんな理由で選んでいいものなのか…」
「いやいや、他にも理由があるんだよ？　実際彼は実力があるしね。
なにより、彼は彼女達と深い関わりが…っと、言い過ぎかもしれないね。とりあえず、アラタ君も良い経験になるだろうから行ってくると良いよ。」
「ふむ…　じゃあ行くか。」
「了解っス」
「分かったわ。」
「ユイさんの消滅は止めなければいけませんからね。」
アラタ達は学園長室を退室して、地下の迷宮へ向かった。

パーカーのポケットからリボルバーの拳銃を取りだし、襲ってくる魔物に連射する。
「はぁ…魔物多いなぁ。」
「うわっ！　ちゃんと狙えって！」
ん…？　あれ。すごい方向に射撃してた。
「アキオは早く壁を壊してください。ユズルはしっかりとサポートを。」
「ごめんごめん。なんか…皆は強いから気にならないだろうけど…ユイに近づくにつれて眠くなってさ…　ふぁぁあ。」
ちょっと耐えきれるか分かんないよ。寝そう。睡魔が敵なのはヤバいなぁ。
「そうですね…　早く消した方が良いでしょう。枢機クラスの彼女ですし、被害はこれから大きくなるでしょうからね。」

「ん…　今回は殺さないで欲しいな。殺す必要はない。崩壊現象も止められるしさ。」
「…ユズルがつらくなるだけです。」
「俺の苦痛より救える命を優先しなきゃ。正直、ユイがいなくなる方が苦痛だしね。」
「ユズル、大将。やっと着いたぜ。…先客も居たらしいけどな。」
　そんな話をしてる間に、もう目的地だとか。ねーちゃんが壊した壁の向こうからは、メイガスモードのアラタ達が立っていた。やっぱりか。
「んー…　ちょっと寝てて貰おうかな…邪魔だし。」
　スケアリーモンスターズで身体を恐竜にする。最強の身体能力。いいね。
「…アラタさんは銃もまともに使えないっスから、しょうがないっスね。」
　レヴィが忍刀を構える。お、レヴィが相手か。
「良いの？　俺、このチカラを知ってる人と一対一なら…本気で眠らせてあげるけど。」
「時間稼ぎっスよ。アラタさん達は先に行ってくださいっス。」
　なるほど…　時間稼ぎってのは良い考えだし、俺がレヴィを殺すなんてあり得ないから危険性は少ない。でもさ…
「稼げると思う？　…5秒稼げれば良い方でしょ。」
　右手を前に突きだして、魔力を放出した。

「ここがユイさんの部屋です。」
　リリスが指差す先には、『邪悪な魔導士　ユイの部屋』と書かれた扉があった。
「こりゃまた定番だな…」
　アラタ達はここに来るまでも何度かコッテコテの罠や仕掛けを目にしてきたのだ。
「開けますよ」
　ギィィと重い音がして、扉が開く。そこには、膨大な障気の塊―

Dの幻想（コード）と呼ばれる龍と、その龍に包まれるユイの姿だった。

眠り姫とDの幻想

「これが…　ユイなのか？」
　アラタが不思議そうに眺める。アラタは夢の世界でユイと会ったが、そのときと姿と違うのだ。
「ユイは夢の中と姿を変えているのよ。あれはユイの理想の姿。」
「ふむ…　なるほど。」
　納得しているアラタの背後で、大きな扉を開く音がした。
「んー…　Dの幻想（コード D）かぁ。また厄介で…」
　アイツすぐに噛みついてくるから嫌なんだよ。
「ってかユズル…　そのパーカーさっきと変わってないか？」
「え？　あぁ…ま、本気モードみたいなモンだよ。」
　俺はいつも黒くて無地のパーカーを着ていたけど、今は灰色で背中に紫の炎が描かれたパーカーを羽織っている。。
「ふぅ…　危うく眠るところだったっス。」
　レヴィが天井から降りてくる。
「レヴィさん！」
「無事だったのね。」
「さすがニンジャ。…で、あのドラゴンどうすれば良いんだ？」
　アラタが困った様子で聞いてくる。
「ユイの魔力が暴走したものだからね…　魔力をほどほどに減らせばあの龍も消えて、ユイも起きるでしょ。」
　タッタッと歩いて龍とユイに近づく。リリスに注意されるが、無視。龍が大きな口で襲ってきた。自分の左腕をその口に押し付け―
「それでも喰ってな。」
　左腕の肩をスケアリーモンスターズの右手の爪で切り離す。これで拘束されなくなった。龍の口も塞いだ。後はユイに近づいて、頬を舐める。瞬間の激痛。またか…　手を握りしめて我慢する。
「おいおい、そんな変態だったか!?―って…」

ユイを包んでいた龍が消える。やれやれ…
「食べただけだよ。魔力を。…この状態なら、なんでも出来るんだ。良いだろ？」
作り笑いの後、大量の魔力で身体は崩れ落ち、視界は黒く染まった。
「…あぁ…痛ッー」
視界がはっきりしてから、最初にきたのは頭痛だった。次に腹部への衝撃。
「お兄ちゃんーっ！」
ユイの声が頭に響く。お兄ちゃんって…　俺より身長大きいくせに何いってんの…　てか俺の年齢言ったっけ？
「ユイのせいでお兄ちゃんが消えちゃったら…この世界を…　壊そうかと思ったんだよっ！」
ほぼ半泣きで抱きつかれる。さすがに世界を消すのは止めてよ。
「はぁ…　いつも倒れるのに魔力を吸うなんて…　危険極まりない。」
「ま、無事で良かったけどな。心配したんだぞ？　大将も落ち着かなくて大変だったしな。」
ミラとねーちゃんに怒られた。しゃーないじゃん。友人を助けるためだし。だんだん時間が経つにつれて頭痛は収まってきた。だが次は切り離した左腕が…　というか左肩が痛い。
「ユズル…　腕大丈夫なのか？」
「うん。右手さえあればいくらでも創れるよ。ゴールドエクスペリエンスッ！」
ゴールドエクスペリエンスを呼び出し、部屋の床を殴る。すると、殴った部分が左腕に変化していく。その左腕を肩にくっつければ完成。
「凄いですね…」
「完全な治癒能力ね。」
「ユズルの能力は魔術を上回るものもあるっスからね。」
ん…　治癒能力ではないんだけど、今はいいか。ユイも救えたし、皆も無事だし。

今日は風呂に入る気力さえないや…疲れ…
睡魔にノックアウトされた今日この頃。

平和な授業と争奪戦

起きた…

あれ、ユイを助けて…　どうしたっけ。でも自分の部屋のベッドだし…？　枕下に手紙を発見。なんだなんだ。

『元気か～？　ぶっ倒れた後起きなかったから、おぶって部屋に寝かしておいてやったぞ。皆も心配してたから、早く復活しろよ～？　ねーちゃんより』

あー…　思い出した。睡魔と頭痛にノックアウトされたんだよ。確か。ふぅ、またねーちゃんには感謝しないといけないね。で、この状況は何？

裸で俺のベッドで寝ているユイとアリン。理解不能。…アラタは何故か部屋に居ないし…　眠いから幻覚を見ているだけかな？

「おーい、ユズル～　もう授業に行ｋ…」

噂をすればなんとやら。アラタの目がユイとアリンを見た瞬間にアラタは停止した。

「…リリスには黙っておくから。」

「アラタさん、ユズルさん、もう授業です…よ…」

噂をすれば（ｒｙ。アラタの謎の気づかいが水の泡だ。

この後、リリスの叫びではっきり目が覚めた。

～体育の授業～

ほぼサボっている俺とアラタ。なぜなら暇だから。

「にしても、魔導士の授業で体育があるとは…」

「体力は魔導の基本だからね。特に女子は体力が元から少ないからさ。」

「なるほど…　鍛える必要があるってことか。」

「そゆこと。」

校庭に座り込み、読みかけの本を召喚する。読書ってのは違う世界に行ったみたいでワクワクするね。

「うおっ！　何も無い空間から本が…魔導書か？」
「いやー、魔導書だったら良いのにね。残念ながらただの本だ。空間から出てきたのは『コレ』のチカラ。」
　右腕の手首に付けているシンプルな腕輪を見せる。アラタはそれを覗き込むが、イマイチ分かっていないようだ。
「それが…　何なんだ？」
『おっ。コレは結構凄いぜ、マスター。』
　コイツも起きていたのか。アスティルの写本に凄いって言われるなんて嬉しいね。アスティルの写本の方が何万倍も凄いんだけど。
「アスティルの写本は気づいてるけど、なかなか便利なんだ。この腕輪。空間と空間の狭間に擬似的な世界を創り、その中にどんなモノでも収納できる…　そういう魔道具だよ。」
　俺は基本は本を収納しているけどね。
『ようするにド〇えもんの四次元ポケットだ。』
「それは便利だな。」
　ブッ飛んだ説明ありがとう。アラタも納得してるしそれでいいや。
『だが、そんな代物は学生の手の届くような値段じゃないぜ？　そこらに売っているモノでも無いしな。どこでどうやって買ったかが気になるところだな？』
「そんなに凄いのかこの腕輪。」
「まぁね。手に入れるのも苦労したんだよ～？」
「確か知り合いを脅迫して貰ったんスよね？」
　レヴィがいつの間にか横に立っていた。ニンジャって恐い。
「お兄ちゃんったら…ユイが欲しいものをなんでもあげるのに～」
「知り合いを脅迫…ユズルは横暴ね。」
　ユイとアリンも気がついたら居た。皆して気配消すなよ。そして自然な流れで抱きつかれる。俺の身長が低いからと言って抱き人形代わりにしないでよ。
「脅迫なんてしてないって。ただ知り合いに貰おうと思って、話し合って本人も了承した上で貰ったんだよ。」
　レヴィはすぐに嘘をつくんだよ。まったくさぁ。

「…話し合いでの出来事は？」
「…俺がたまたま持っていた拳銃がたまたま暴発した。その銃弾がたまたま知り合いの耳を貫通した。それだけ。」
「ずいぶんと偶然が多いっスね…」
　世の中偶然だらけなモンだよ。いくら知り合いがモノを渡すのを拒否してたときに銃が暴発しても、偶然だから仕方ないんだよ。ピストルズが銃弾を蹴ったのも偶然だからね。
　そんな感じで俺に高価なモノをくれる知り合いの心の広さについて話していたら、リリスにサボりを指摘された。リリスについてきたねーちゃん達やセリナも集まってくる。授業終わったの？
「トリニティセブンがアラタさんとユズルさんに集まっている…　これはまさか…二人の争奪戦！」
　セリナが盛り上がってきた。彼女はもうカメラを構えている。いつも思うけどカメラどこから出してんの？　今まで体育で走っていたのに。
「そんなの始まりませんって…」
「そうっスね…ここで決着をつけるのも良いかも知れないっス。」
　レヴィはリリスの事に気をつかってやれよ。リリスが凄い驚いた顔してるぞ。
「俺も混ざっていいのかな？」
「良いんじゃないか？　前回は邪魔が入ったしな。私もいっちょ暴れるぞ～？」
　ねーちゃんのお許しが出た。やったぜ。そして争奪される本人が争奪戦に出場という訳の分からない状態。ま、良いか。
「本妻の意地を見せないと…」
　アリンは魔王の番だけど、結局アラタと俺のどっちの番なんだ？
俺は解析不能ってだけだから多分アラタが魔王なんだろうけど。どっちにしろアリン本人の意思だよね。
「お兄ちゃんの争奪戦と聞いたら、参加しない訳にはいかないね！」
　こうして、俺とアラタを賭けた争奪戦が始まった。

夢の中でと風呂場の中で

各々が書庫に接続する。
羨ましいなぁ。魔導書を持つ魔導士ってのは。魔導書って普通の人間が読むとヤバいんでしょ？　俺普通の人間だからなぁ…　魔導書恐いよ…
「隙有りっス！」
レヴィがクナイを投げてくる。俺にも準備する時間くらい欲しいよッ！
「召喚、アヌビス神ッ！」
腕輪が光り、アヌビス神が宿っていた刀が出現する。だけどもうこの刀に意思はない。だって俺がアトゥム神で刀の魂を抜き取ったから。おかげで達人級になれたり攻撃を覚えたりは出来ないけどね…
物体はすり抜けるし、何より俺自身が操られないのが大事だしね。
クナイを弾き、反撃を食らわせようとした瞬間…輝きに包まれた。
「眩しっ！」
例えるなら寝起きに部屋の電気をつけられた並に眩しい。不意討ちすぎる。

視力が回復すると、ファンタジーでメルヘンな世界だった。
「…あぁ。ユイか。」
「そうだよ〜　勝手にレヴィちゃんと闘い始めちゃうから…　ズルいよ〜。」
ユイの夢の世界。ユイは大人の姿だけど…　性格と行動がいつものユイだからなぁ。
「ズルいってのはよく分からないけどね。他の皆は？」
「他の夢を見てもらっているの。」
周りを見回すと、寝息をたてて寝ている皆がいた。レヴィが天上に貼り付いて寝ているけど、どういう原理なんだろう。
「…で、こんなところで時間くってていいの？」

唯一ユイの魔術を反射させたミラに問う。なんでも跳ね返すからなぁ、ミラは。跳ね返せない魔術って何なんだろう。
「よくありません！　王立図書館検閲官としての仕事があります！貴方も次席なんですから、ちゃんと手伝ってください。では先に行っています。」
そう言い残して、シュンと消えてしまった。
「ふぁ…　めんどーだなぁ。」
「でも、なんだかんだ言って手伝うんだね？」
ユイがからかう様な笑みを見せる。
「ミラは先生みたいなものだし…友人だからね。」
「そっか…　友人は大事なんだね。」
そういえば…ユイのテーマか。友情。至極単純な事なのに。
「んー…まぁ大事だけど…　そんなの考えないよ。友人が近くに居るのが日常だしね。そんな訳でユイは難しい事やんなくても、俺とか皆とかと楽しく過ごしてりゃ、友情が分かるよ。友人だからね。」
さて、そろそろ出ようかな。ミラに怒られちゃ嫌だし。
「お兄ちゃんと友達…？」
「ユイがそう思っているならね。」
一方的な友達は友情とは呼べないからさ。それじゃ、と手を振って帰ろうとしたとき。
「ありがとっ」
そう言って頬にキスをされた。それも友情表現の一つだね。そう思いながら、夢の世界を後にした。

とある場所にて。
そこは、崩壊現象が起こり、魔物がはびこっていた。右手首の腕輪でアヌビスの刀を召喚して、魔力を放出…
「やっぱり数多いなぁ。　〝ﾚﾆｭﾆ〟（炎）」
アヌビスの刀に属性付与して、襲いかかってくる魔物を斬り倒す。ミラもねーちゃんも、余裕に倒している。起点の魔物をさっさと消して、終ろうか。どうせ魔物の時点で意味はないから。あのときの彼ら

のように。

風呂場にて。

「んー…　疲れたなぁ。」

「そういえばユズルは久々だったかもな。」

「そうですね…」

俺とねーちゃんとミラで風呂。腰にタオルを巻いて、くつろいでいる真っ最中。

「お…　どうしたんだ？　大将。元気ないじゃないか。」

「魔物になった奴の事？」

ミラは少し考え事をしているようだ。

「…彼女とは、知り合いだったので。彼女は私と同じ書庫でしたから。」

「知り合いが魔物になるのはショックだよなぁ…　少し休んだ方が良いかもしれないぞ？　大将。」

ねーちゃんが慰めるようにミラの頭にポンポンと手を置いた。

「ミラは働きすぎなんだよ。魔物になった奴は、以前の奴じゃない。考え過ぎないで気楽にいきなよ。　…たとえ肉体が人間であっても。魔物は別のものだ。　っとと…」

少し昔の事を思い出してしまった。どうせ彼らが戻る訳でもないのに。

嵐の夜と崩壊現象

とある豪雨の晩が明けた。
することもないので寮の部屋でアラタとのんびりしていた。
「王手。」
「＼（＾ｏ＾）／オワタ」
腕輪から召喚した将棋で遊んでいるのだが、アラタが壊滅的に弱いな。この光景がデジャヴすぎるし。
「うーん…　やっぱり俺はチェスの方が向いているらしい。」
「ん、チェスが得意なの？」
「まぁな。」
腕組みをして胸を張るアラタ。そんなに得意気ならみせてもらおうか。そんな訳でチェスに変更した。

「チェックメイト。」
「／（＾ｏ＾）＼ナンテコッタ」
アラタが頭に手をつけて負けを認めた。こんなハズでは…と嘆くので、次はポーカーをやってみた。

「ロイヤルストレートフラッシュ。」
「（　・◇・）え？」
状況の判断がつかなくなっているようだ。オセロでもやるかな。

「お疲れさま。」
「（，・ω・、）」
俺の色に塗りつぶしてやったぜ。もうじゃんけんでいいや。

「52勝0敗で俺の勝ち。」
「（，д（）：ｏｒｚ」
なんかもうかわいそうになってきた。そのとき。

「アラタさん、ユズルさん、少し良いですか…って何があったんですか。」
ベッドで死んでいるアラタをリリスが気にかける。
「気にしないでいいよ。んで、何の用？」
もう分かっているけど、一応聞いておかないとね。『ちょっとした事件が起こった』と言われ、アラタと事件の現場へ向かった。

校舎の廊下にできる人だかり。そこには、砕け散った窓ガラスがあった。
「…これはアレか？　スクールウォーズ的な？」
「さぁね。ま、学園長が大変だよね～。」
「どうやら昨晩に何かあったようで…」
口々に呟く。早く片付けないと危ないんじゃないの？　ガラスの破片とか。
「崩壊現象の痕跡を感じます。」
人だかりの生徒達が道を空けた先には、ミラとねーちゃんが歩いて来ていた。
「んー。やっぱりそうなんだ。」
「ユズルは気付いていたのか？」
「ガラスが割れた事くらいだけどね。俺、耳は良いから。」
「割れた音を聴いてたのか…」
学園長が飛び込んだせいかとも思っていたけど、崩壊現象だったのか。
ふと目をやると、ミラがジト目でアラタを睨んでいた。あー…
「アラタが崩壊現象を起こしたんじゃないかって考えてんの？」
「えぇ。今のところ、崩壊現象の容疑者はそこの不浄な男とユイさんだと考えられています。」
逆に、アラタとユイを疑わない方が難しいよね。
「えーっ、酷いよ～。」
ユイが俺の左腕に抱き付いていた。気配消すの止めてってば。あと会ったときに毎回キスするのって風習とかなの？　ユイ毎回キス

するんだけど。別に良いけどさ。
「ユイが疑われるのも無理ないだろーけどさ。俺の意見を言わせて貰っても良い？」
「はい？」
「何ですか？」
「雰囲気というか…なんか…『図書館』のときと同じ匂いがする。第六感的な？　とりあえず、そっち方面で調べてみてくれない？」
気配とか、空気が肌に馴染んでいる感じ。…俺もちょっと調べておこうかな。

同日、教室にて。
「ユズル～、図書館のときって何だ？」
「ん、何が？」
「さっき言ってたじゃんか。何の事なんだ？」
教室で調べ物をしていると、アラタに声をかけられた。見れば、ユイやアリン、レヴィまで居る。
「ユイは知らないかもだけど、前に図書館で事件があったんだよ。そのときのと今回の事件が似てるってだけだね。まぁ詳しい事はリリスとかに聞いて。俺ちょっと用事ができたから。」
詳細は語りたくなかった。どうせレヴィとアリンが説明してくれるだろう。だから、その場を去るための口実としても、図書館へ向かった。どっちにしろ、調べ物に必要な書物は図書館に置いているから。…この先必要になるであろう書物も。

永劫図書館と怠惰

図書館へ向かうと、すでにアラタ達が居た。調査のためだろうが、リリスやミラ、ねーちゃんも居た。そしてセリナも。…無関係では無いし。

「邪魔しないでね？」

読書中に邪魔入るのが一番ムカつくからさァ。アラタはそれを了解して、レヴィやユイ、アリンと話している。

俺もやることやんないと。必要な本を選んでいると、カメラを持ったセリナに話しかけられた。

「お姉ちゃんは…戻ってくるんでしょうか。」

「ん…　引きずってでもこっちに返すよ。その間は俺がセリナを守るし。そんなの考えないで良いんだよ。」

本棚から本を選んで抜き出し、机に置いていく。考えて、気を使った言葉ではなかった。無意識に、てきとーに文が口から出ただけだった。だから多分、嘘は混じっていないのだろう。実際、守るしね。

瞬間、視界がぶれて、空間がずれた感覚に襲われた。

視界のぶれが収まると、そこには図書館ではなく何処かの遺跡のようだった。なんだっけココ。

「これは…永劫図書館！」

ミラが呟く。永劫図書館…成程ね。

「ちょっと寝てる間に面白くなってるじゃんか。お前らは隅に固まってた方が良いぞ～？」

ねーちゃんが首を揉みながら、身体を伸ばす。

「だってさ。セリナも少し下がって…　ッ！」

瞬間、黒い影に攻撃された。持っていた本がバラバラと落ち、思わず膝をつく。セリナは守れたが…

「ユズルッ！」

「いやー、左腕がボキボキだ…　痛ーッ…」

アラタが叫ぶ。１と０の帯が俺の左腕に絡まって、ゴシャっと骨を折りやがった。スタンドを早く出現させる練習をしないとなぁ。
「…久しぶり。リーゼ。」
攻撃した本人に目を向ける。膝をついているため、見下ろされた状態で言葉を返された。
「そうね…　だって、ユズルが来ないから会えないんじゃない。」
「勉学に励む男の子はそんな暇ないんだよ。」
「ま、いいわ。確かに、今の攻撃も腕を切断するためだったけど、本を障害物にして威力を下げるなんて前じゃできなかっただろうし。魔力も高まっているだろうしね。」
このヒトは、前と変わった気がする。全ての魔力を吸収しようとしているような。
「んーと、彼が噂の魔王候補？」
「そーそー。早く挨拶してくれば。」
そのうちに腕を直しちゃうから。魔導書がなくても、図書館の本と魔力を振り絞れば、簡単な魔術くらいならできる。腕が無い訳ではないので、Ｇ・Ｅは使わない。つっかえながらも、〝修復〟の　詠唱ができた。腕を多少動かせる。
リーゼはリリスとミラの魔力を貰うのに失敗していた。
「で…アイツは何なんだ？」
アラタが不思議そうに問いかけるので、答える。
「怠惰のトリニティセブンだよ。テーマは自分と反対のモノだけど、怠惰の反対…勤勉な性格には見えないね。」
確かにそうね、とアリンが納得している。そのまま自分の性格をテーマにしたのかな。
「そして、リーゼロッテ＝シャルロック…私の双子の姉です。」
「　元王立図書館検閲官次席…」
「彼女は禁忌とされていた永劫図書館に強制接続した罪人なのです。」
セリナ、ミラ、リリスも続けて話す。
「んじゃリーゼ、皆で攻撃しちゃうよ？　そろそろ帰ってきてもらわないと。」

全員、メイガスモードになる。アラタもメイガスモードになり、錬金術を成功させる。密かに練習をしていたのだ。
「これは…分が悪いわね…でも。」
リーゼがセリナの背後に瞬間移動すると、手を絡ませ、セリナの首に噛み付き―
考えるより先に身体が動いていた。理由はなく、反射的だった。
リーゼが吹っ飛び、俺は蹴りの姿勢で固まっていた。
「セリナに危害を加えるなんてさせない。」
よろけたセリナを支えて、リーゼの方を見ると、アラタの足下に倒れていた。…少し目を離した隙だった。少しの間、もう一度セリナや皆の安全を確認して、リーゼを見ると、完全に力が増えているのを感じた。アラタがぐったりしているのも見えた。瞬時に数秘術を使い、アラタから魔力を奪ったのだ。
「永劫図書館に封じ込められていた魔王因子で…私は魔王候補になったのよ。」
リーゼは黒い翼を生やし、不敵に笑っていた。
「はぁ…　なんで魔王候補なんて。魔王はどうせ滅ぼす事しかできないよ？　そんな奴の候補に…」
言いかけたところに、被せられた言葉は、昔の深い傷をえぐった。
「さすが。大量殺人者は…　魔の血族は滅ぼす悲しみを知っているのかしら？　でも私は、魔導士として高みに登りたいの。」
全て間違っていない。大量の人間を殺したし、魔の血族でもある。ただ、その隠し事をばらされるのは、心が少しイラ立った。
壊したくなかったから。

血筋の力と言葉の力

「大量殺人者!?　魔の血族ってどういう事だ!?」
　アラタが混乱している。当たり前だね。でも、これで話さざるを得ない。やれやれ、ホント泣けるよ。少し吹っ切れた。
「…ふーん、ユズルはまだ話していないんだ。　ま、いろいろあるからね。　私が話してあげてもいいけど？　ユズル…」
「〝覚醒〟」
　言葉を遮る。こうなれば、すぐに終わらせられる。みせてあげようか。太古から続く魔の血族の能力。
「アラタ、『俺』を見せてやるよ。西城ユズルじゃあない。本当のチカラをさ。んで…」
　リーゼに目を向ける。気を引き締めたって感じだけど、まだ勝てると思っている。
「実験台になってもらおうかな。」
「怒らせちゃった？　魔王候補クン、よく見ておいた方が良いわよ。他の皆も。ユズルの本気なんて滅多にみれないから。」
　そうだね…レヴィには一回見せたっけ。ミラとねーちゃんにも。
「いくよ。　〝目標設定〟　〝束縛〟　〝領域〟―」
　攻撃相手を定め、相手の動きを封じ、攻撃を封じる。リーゼの身体は白い光に束縛され、黒い立方体で囲まれた。一瞬だし、俺は口しか動かしていない。
「やっぱ…コレヤバッ…　成長しすぎ…」
「で、アラタ。分かった？」
「速すぎて何がなんだか…」
　だろうね。ちょっとやり過ぎた感あるもん。
「まぁ、ばらしちゃうっスけど。ユズルは言霊の使い手なんっスよ。」
「そうそう。魔力を言葉に宿らせるんだよ。喋った事が現実になるんだ、簡単に言うと。」
「それはスゴいな…」

「ま…大量殺人とか、魔の血族とか…言霊とも関係してんだけどさ。学園長にでも聞いてよ。」
学園長なら知っているだろうし…　能力も近いからね。
『言霊のにーちゃん、あいつ、言霊で創った束縛やにーちゃんの領域の黒い箱を崩壊させてるぜ？』
あ、ホントだ。もう抜け出してる。リーゼすげぇ。
「ハァ…　魔王候補クンの魔力を貰わなかったらヤバかったーっ。成長したわね、ユズル？」
「まぁ。そっちも、崩壊現象で俺の領域を壊すなんて。俺の領域内が崩壊しただけでよかったよ。今は魔力が高いらしいから、倒すのは骨が折れるね。また襲って来られると嫌だしさー、〝魔力崩壊〟ちょっと不安定にしてみた。」
まだ言霊を使う魔力は残ってんだよ。これでしばらくは襲ってこないでしょう。
「ッ！　やっぱりあなどれないわー…　こうなったら退くしかないけど、仕返しくらいはしていくわよ！」
パチンと指を鳴らし、瞬間移動で帰っていった。仕返しって何なんだろう…
ビリィ…
背後で皆のメイガスモード強制解除…変態魔術の音を感じたとき、元の図書館に戻ってこれた。
「ユズルー!!」
「俺かよ!?」
リリスから理不尽な怒りを受けた今日この頃。

学園長室にて
「ユズル君が何者かを知りたい？」
学園長と、アラタ、リリス、ユイ、アリンが集まっていた。
「ユズルがリーゼと闘っているとき、言ってたからな。学園長なら知っているだろうって。」
「大量殺人者であり魔の血族とか言ってたわ。」

「お兄ちゃんからそんな話初めて聞いたよ？」
「私も、ユズルさんはあまり自分の話をしないので…」
　アラタ達は知っていそうなミラやレヴィ、アキオに聞いたが、断られてしまったのだ。
「うん、軽々しく扱えない話題だからね。彼が僕に話せって言ってたし、教えてあげるよ。
　彼はね、魔女の血族なんだ。とても力のある血筋。」
「だから…魔の血族？」
「恐らく。最近の血族は魔力が低下していって…自分が魔女の血族だと知らないんだ。そんな中産まれた彼は血族の中でも二番目の魔力量。彼が魔女としての力を使って調べた事だ。」
　学園長は、とある場面を思い浮かべながら話した。
「…何年か前に、一つの小学校で自殺した生徒がいるんだ。公にはされていないけどね。」
「あー…　いじめってやつか？」
「いや、違う。なぜなら、自殺した生徒は７３８人。たった一人を除いて全校生徒全員だ。生徒達は放課後の教室で、首を吊っていた。全員同じ時間に、同じ方向を向いての集団自殺。」
「その一人って…」
「ユズル君だよ。両親が居なかった彼は、言葉の暴力を受けていた。そして、血族でも魔力が高くないと使えない…言霊の力を無意識に使ったんだ。魔導書を持たずして使えるのは、彼が魔女の血族だからだろうね。魔女の呪い。それは言霊に酷似しているから。
　僕が教えるのはここまでだ。早くユズル君に会っておいで。彼は言霊を知られた事にショックを受けているから。」

『こいつ、親に捨てられたんだ』
『こいつが親を殺したんじゃないのか？』
『お前も親のいるところに逝っちゃえよ』

起きた。悪夢。気分が最悪だ。はぁ…あいつらは、大量の言葉で俺を殴ってきたのにさ。俺がたった一言で殴ったら、すぐに壊れた。

…ん、ミラに呼ばれてたんだ、そういえば。起き上がって、パーカーを羽織る。

アラタ達は、俺の事を知っても、変わらずにいてくれるかな。